

5/17
II-201

幼児の遊びの研究
積木遊びに見られる発達過程

島根好雄 河野しえ 大塚保育所 高塚照夜
母里保育所の小原美穂子 仲西則子
みゆき 稲田紀子 大森保子
〔目的〕 保育活動場面において、1才から3才の幼児の積木遊び行動の発達プロセスを明らかにしようとするものである。
〔方法〕 積木遊び(床積木)の行動観察記録により整理する。(積木基本寸法…6cm 種類①直方体大小②直方体 ③三角柱)

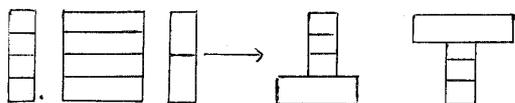
〔観察時期と対象人員〕
S 48.7~48.9 1才児 19名 2才児 34名 3才児 7名 計60名
S 49.10~50.2 1才児 8名 2才児 14名 3才児 6名 計28名
〔結果と考察〕 本学会の73年には、大型椅子積木74年には、はめこみブロック遊びの観察により、発達過程を明らかにしてきた。それによれば、これらの手を使う玩具遊びの発達には、段階(節)があり、その節をのり越えた時には、子供の生活全体に大きな発達の変化がみられるのである。本研究において言えば I 対象を知る段階、II 使い 試みる段階 III 自由に構成する段階と3つに整理したが、更に積木を構成しつつ、喃語のあとの話しことばの発生する過程に於ける行動の広がりを見逃さず、発達連関的にとらえようとするものである。その結果を下記のようにまとめた。

	対象を知る段階	使い 試みる段階	自由に構成する段階
積木の構成	1~2個から3~4個へ 直方体と直方体大小の認知 重ねかえる置かぬ くずす、くり返す	5~10個→13個位 三角形を使う 積木の形を生かして構成で種みかえ 並びかえる	構成は変化にのみ複雑になる。 扱う個数はさらに増える
ことば	発生語 一語文	一語文 二語文	「はなしことば」
行動のひろがり	積木の数は少く、遊びは断片的である。	積木の数が増えることに表われているのに行動のひろがりが目に見えて変ってくる	次の発達達成の準備のためのいろいろな活動

〔対象を知る段階〕

I 1個か或は2個の積木を手と目その他味触などの感覚機能でもって積木というものの性質を知ろうとする段階である。1才3月~1才8月にあたる。この場合の積木の性質というものを考えてみると、直方体、直方体大小、三角柱の各種類の形態を主とするものであろう。この各種類の違いがわかり始めくると、両方の手に2個(例えば直方体と直方体、又は直方体と三角柱)をもつ。こうして目と手でその積木の性質を確かめることになる。そうすると次に片方を下に置きもう片方を重ねるのりに上のせる。又これを2個置き並べ、それを左右交互に置きかえる争をする。それが次第に3~4個の積木をおき、並べかえ、持つ積木だけ、それを又くずしたり又積みという争を何回もくり返す。これらの積木の内三角柱は始め常に対象外となる。除け(まう)のである。それは何故かわからない。三角柱の用途は積んだ上へ一つのせることである。塔の形の完成の役に使うことはある。遊びの中から言葉が発生するという争は重要だと考えるが例えば手で積木を自由にした時積木の音と共に「パンパン」という言葉を出し積木の音と共に思わす声が出るのである。一語文にすぎないがそういう争が言葉の始まりであると思う。行動の広がりについて言えば、この最も扱う積木は1個~2個で、それは段々3~4個を持っておきかえていくようになるが(しかも自分と積木との肉わり合いで止まっているのであり、それを持つたりしながら、その性質を知ろうとする様な非常に狭い生活の範囲内にいるわけである。しかも行動は気まぐれで衝動的なものである。

〔使い 試みる段階〕
II この段階は、まず積木の構成遊びができ始める段階である。1才6.7か月~2才5.6月にあたる。扱う積木の数が増加する。(5~10個→13個ぐらい)とともに積み並び置くという手指の技術的なまづきが次第に洗練されて巧みになる。そうすると行動は意志的・目的活動として意欲をもってくる。構成は、はじめ積んだり、こわしたりのくり返しだけが主であるが、意向性はよわく無造作にのせるから(いい加減)キチンと重ならない。この様に試みの中から「定理」を発見していく。例えば基底と部分の関係構造を図のように黙々とやって発見するものと思われる。



この作業の時のことであるが①必要としない□や△を払いのけ選別する。②直方体をたてに使用した事で「タカイ」と認知する。③最後に△色のせま「タカイトコロ」と指さすなどに気づいた。このような試みをしつづける技術が向上してくると、重ね、並べ方が安定してくる。そして次第に角をそろえることができるようになり、ついで①立体構成②違った形の組み合わせ構成、③同じ形のものも別にも一つつくる。(複製、対をつくる)という積木構成上の飛躍を遂げる。熱心なくなり返えし作業が続く。そうするとことばの獲得はいよいよ感動的なものになってくるが、日常生活用語がゆたかになってくるのに比べると、積木遊び活動中のことばは感動的であって、量的に少ないといえる。

「ズベツ！ ツミキ！」「タカイ！ タカイ！」「パン！ プープー」
 「キシキシ シボシボ」 「ウー ウー」
 「ホッポー ガタンガタン」 「オウサン アナイアナー」
 「コワレタ！」 「カマートイケン」(さわかな) 「ココミテ」
 「イケンニ」(いけない) 「ツクッタ」(できた) 「タカイナー」
 積木構成の状態をいい表わそうとし、又はつくり上げた時点でことばが発生し、文が二語文になりさらに人との関係用語が生まれまくる。この場合保育者との共感を求めようとする。又ものを何かに見たてることによることばが動的に生れる。(身ぶりを伴って) 扱う積木の数がはつきり増えて、それらを使って遊ぶことができるようになり行動のひろがりや行動の質的な変化は大きいものである。その質的な変化というのは無造作で行動そのものがキテンとしていないものから、次第に難関な行動になりことばに方向づけられた志向性をおびるようになっていくものである。

〔自由に構成する段階〕

Ⅲ この段階では、行動は自信ありげに、自由に積木の構成遊びをする。2才5.6ヶ月～3才5.6ヶ月にあたる。扱う積木の数は10個～20個から→もっと多数の積木を扱うようになり、形の違っても自由に使いこなすようになる。そして子ども自ら遊びの中で

課題性をもつと共に目的活動をする様になる。

その主な活動をあげると

1. 不安定な重ね方を試みる →
2. 空間の発見 (トウリヤンセ、トンネル)
 ↓
 空間を持つ構成(おくり、車庫、おふる)
3. 対称形、交互構成(モチフツなき)
4. 斜めの構成 →
5. 平面と立体の組み合わせ →
6. 三角柱の合成
7. タテ、ヨコの広がりができる。

これらは、子どもが自分で作り出した課題に取り組む純粋な自発的活動として特徴づける事ができる。日常生活では話し言葉は、かなり盛んに練習されておしゃべりである。積木遊びの中でも動作、身振りを伴って積木を動かしながら、又はつもり遊びに発展させイメージを描きつつ言葉がどんどん使われる様になる。それはノノごとから呼びかけや報らせる言葉となって発せられるがいずれも話し言葉としては殆んど完成されたものとなっていくのである。

「ツクッタ ツクッタ」 「オウテツクッテ コウヤッテ」 「パンテスヨ」
 「センセイトオシテ」 「オムテスヨ」 「ミンナコレハ ヤキイモテスヨ」
 「アツクテスヨ」 「手がデラレルヨ」 「マタヤキイモスーカ」
 「ロソクノツイタケキダヨ」 「コレハオウテヨ」 「ヤネガデキタ」
 「ワタシモヤネ」 「イマココカワトコダモン ココハシゴ」 「今ヒポ
 ポーヒポーノハシゴ」 「カノオウテケンハンソノオウテツクッ」
 行動のひろがり

扱う積木の数は一層増加して、積木構成は変化をもち複雑なものができる。言葉は一人ごとにも話し言葉の形が整って、それが動作、身振りを伴った説明、よびかけ、などの言葉として社会的な関係を作り出そうとしている。次の発達段階達成準備のために志向的に豊かな経験を重ねている段階であるといえる。